

# 教員と外部専門職との協働により生じた個別指導・支援の葛藤に関する一考察 教育困難校における生活指導の場面に着目して

○ 柗澤利也（早稲田大学大学院）

## 1. 問題設定

本研究の目的は、教育困難校の生徒指導において、教員の集団指導と個別指導（支援）の葛藤やジレンマと、教員が外部専門職と協働するなかで克服する場面を描き、それらを考察することにある。

近年、学校は生徒の様々な課題に対応することが求められている。柔軟なコミュニケーション能力の不足議論（古賀 2013）に示されるように、児童生徒の自己責任による社会適応の問題へと向かいがちであるが、実際には社会環境の変化自体が、児童生徒の生活スタイルや対人スキルを変容させていることは多い。そのため、学校がそうした児童生徒の社会参加や自立を促進する教育的支援が求められ、学校が「セーフティーネット」としてかれらの社会的自立を下支えする指導の時代が到来している（古賀・山田 2017 pp.14-15）。

この学校のセーフティーネット化が最も求められる学校の一つに、トラッキングが機能することで生じた課題のある生徒が一定の高校に集中する「課題集中校」がある。課題集中校とは、全日制普通科や専門学科における学業達成水準が低い主流の後期中等教育機関と定時制高校や通信制高校、高等専修学校、サポート校などの非主流の後期中等教育機関に課題が集中する高校を指している（伊藤 2013）。また、課題集中校は教育困難校、底辺校とも呼ばれる。そのため、課題集中校では生徒指導が欠かせない。

生徒指導に関してしてみると「高校生が社会的自立を進めていくためには、生徒指導そのものを広く社会的視野に立ち、生きる力としてとらえ直す」必要性が言及されている（国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2006 p.31）。それを実現するために教員たちの組織的な対応による個々人の指導課題へのきめ細やかな働きかけを意図した「個人化した指導」（学習指導要領に倣えば、「個に応じた指導」）である（古賀・山田 pp.18-19）が求められてきている。このように生徒指導は、課題集中校の生徒が社会的自立を担うにあたり必要なものである。

だが近年、教員以外の専門職が学校に派遣されることで、教員のみが生徒指導を通して生徒の社会的自立を担うわけではなくなってきた。なぜならば、スクールカウンセラー事業に始まり、特に平成27年12月に中央審議会から答申された「チームとしての学校の在り方今後の改善方策について」にて生徒指導上の問題解決に向けた「チームとしての学校（以下、チーム学校、と表記）」の必要性が叫ばれているためである。

専門職が派遣されることで教育困難校の現場は、如何にして生徒の社会的自立に向かっているのだろうか、という疑問が生じる。そこで本研究は、生徒指導とチーム学校改革の先行研究を辿りながら、教育困難校の教員インタビューを通して探っていきたい。

## 2. 調査の概要

本研究は、教育困難校に位置づく Y 校の教員へのインタビューに依拠したデータをもとにしている。佐藤（2002）によるとインタビューにはフォーマル・インタビューとインフォーマル・インタビューがある。前者は質問の構造化の度合いが高く、インタビュアーとインタビュイーの間の役割文化の度合いも高い。サーベイ調査の場合の、質問票を使用して行われる聞き取り調査のことを指す。一方後者は、質問の構造化の度合いが小さく、役割分化の度合いも少ない。この「インフォーマル」とは、聞き手が必ずしもフォーマルな役割で質問しているわけではないこと、必ずしも一対一というフォーマルなセッティングでインタビューを行うのではなく、いろいろところで折に触れた質問をすること、という意味が込められている。要するに前者が「聞き出す」あるいは「情報を収集する」という性格と仮定するのであれば、後者は「教えてもらう」あるいは「アドバイスを受ける」という表現がふさわしいという（佐藤 2002 pp.236-237）。この枠組みで捉えるならば、本稿のデータはフォーマルかつインフォーマルないインタビューに依る。つまり、一対一の中で半構造化されたインタビューから職員室内で突如始まった教員方とのインタビュー（会話）まで多様である。そのため教員ではない筆者（調査者）が学校や教員に関して教員から「教えてもらう」というスタンスから生じたデータも含まれている。

## 3. 先行研究と内容

伊藤（2002）や樋田（1999）が規律統制から生徒の個への対応にシフトしていると言及する一方、教育困難校における集団指導と個別指導のジレンマが（古賀 2001）描かれている。本研究は、段階的指導体制のため集団性がより問われる Y 校において、そうしたジレンマが生じるなかで、チーム学校に代表される専門職が生徒へ個別支援を行うと、教員は如何にそれを利用するのかに焦点を当てている。教育困難校に関する先行研究である吉田（2007）、濱沖（2012）等を踏まえたい。詳細は、本報告にて行いたい。

### 主要参考文献

梶野光信・柗澤利也, 2017, 「ユースソーシャルワーカーによる高校生支援」末富芳編『子どもの貧困と教育支援』明石書店, pp. 289-305.

古賀正義・山田哲也, 2017, 『現代社会の児童生徒指導』放送大学出版。

古賀正義, 2001, 『“教えること”のエスノグラフィー——「教育困難校」の構築過程（認識と文化）』金子書房。

佐藤郁哉, 2002, 『フィールドワークの技法 - 問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社。